

---

I was detective.

犀川

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I was detective .

### 【Nコード】

N1461Q

### 【作者名】

犀川

### 【あらすじ】

江戸川コナンと灰原哀が米花町を去ってから数年。中学生となった円谷光彦は思春期に入り、日々複雑な心中を持て余していた。そんなある日、光彦は偶然、下校途中に工藤新一の姿を見かけた。数年前に日本警察の救世主として再び表舞台へ復帰して以来、大学生である現在も変わらず日々難事件を解決している新一。今は毛利蘭の彼氏という立場でもあるはずの彼だったが、光彦が目撃した喫茶店内では見知らぬ女性を抱き寄せていて。光彦のほろ苦い青春物語。

（黒板、ホワイトボード）

ホームルーム。1年B組の教室の後方座席に座るそばかす顔の少年は、机の上で頬杖をつきながら目の前の黒板をぼんやりと眺めていた。次に、その視線を前席に座る男子生徒に向けると、彼は机の下で携帯電話に夢中なのが観察できる。

（携帯電話、スマートフォン）

少年は心の中で唱えた。それから、前席の男子生徒の携帯の画面に視線をやる。

（開いているのはアプリですね。あれは、モンスターバスター？…違うか）

正解を知ろうと少年は更に携帯を注視したが、それを知ってか知らずか男子生徒は携帯の画面を待受画面に戻すと、制服のポケットに携帯を仕舞い、机に伏せた。それを受けた少年は、そつとため息を吐くと、視線を再び違うところへ向けていった。

（窓、ウィンドウ。斜め下げ鞆、ショルダーバッグ。チヨークは白墨でしたっけ）

少年は、次々に視線を移動させては、目に映るものの日本語と英語を心の中で唱えていく。

（……あれ）

その視線の先に開かれた教科書が入った瞬間、少年は首をわずかに傾げた。

（ページは、日本語には無いんでしたっけ）

ページには『頁』という漢字があり、それは訓読みで『ページ』と読むが、それは外来語であったような気がする。しかしそれは少年の思い違いであるかもしれない。

（灰原さんや……コナン君が居たら、当然のように正しい知識を口にしていた）

少年の頭にふとそんな考えが浮かび、少年は慌てて頭を振った。彼も彼女も今はもうここには居ない。もう数年も前にこの街を出て行ったではないか。

少年は息を長く吐き出すと、思考を再びページへ向ける。

「そつえば、缶は英語でもカンですね……」

退屈な時間はどうでもいいことばかりを考えて穴埋めするのが、最近の少年の習慣となっていた。

「光彦くん、帰ろ」

幼馴染の少女の声で、円谷光彦の意識は現実へと引き戻された。

光彦が振り返る。するとそこには、おかっぱ頭を白いヘアバンドで抑えた吉田歩美の姿。

「もう放課後だよ。来週から後期末試験が始まるから、部活は休み」  
光彦の机の上を見て歩美が笑う。

「え？」会話に違和感を覚えた光彦がその視線の先を見やると、そこにはサッカー用のスパイクシューズが置いてあった。

「ああ」

光彦は一人納得すると、照れくさそうに鼻の頭を掻いた。

「これは、今日から部活が休止になるから、自宅へ持って帰ろうと思うって、HR前にロッカーから出しておいたんですよ」

「なんだ、そうだったんだあ」

歩美が更に笑顔を深めた。

「おい光彦、帰ろうぜ」

教室の扉向こうから、見慣れたイガグリ頭のガタイのいい少年が顔を覗かせた。小嶋元太である。光彦は「はいはい、今行きますよ」と返事をする。と席を立ち、鞆の中に荷物を詰めて、歩美と共に教室を後にした。

校門を抜けて、三人揃って帰り路につく。

円谷光彦、吉田歩美、小嶋元太の3人は幼馴染であった。小学校以前からの付き合いである彼らだが、現在は市内の帝丹中学校に通

う中学1年生となっていた。学校指定の学生服。男子である光彦と元太は学ラン、女子の歩美はセーラー服である。

「それで、哀ちゃんったら寝ぼけてお塩とお砂糖間違えちゃったんだって！」

歩美が言う。哀とは、3人が帝丹小学校に通っていた頃に数年間仲良くしていた灰原哀という少女のことである。灰原は、数年前に家庭の事情でアメリカに引っ越していたが、歩美とは今でも電話やメールでまめに連絡を取り合う中らしく、最近は読書で寝不足のときにココアを飲もうとしたら、寝ぼけて入れる甘味料を間違えたという話だった。

「灰原も言い間違いする俺のこと、散々バカにしてたけどよ、アイツだって塩と砂糖間違えてんじゃないなあ」

元太が笑った。2人の会話を心半分で聞いていた光彦は呆れたようにため息を吐くと、

「元太君は間違っ頻度も度合いもずば抜けていましたからねえ……それと比べると、灰原さんの間違いは可愛いものですよ」

「やっぱ俺には敵わねーか！……ってそうじゃねーよ光彦！」

「もー、元太君は相変わらずおバカさんなんだから。ねえ？光彦君」  
「え、ええ、そうですね」

中学生になり、周囲の状況も著しく変化した。自分はもちろん、歩美や元太も背は伸び、特に元太は既に声変わりも終えて、見た目は高校生と言っても既に通用しそうなものだ。それでも、中身はちっとも変わらず見える。幼馴染はいつまでも同じ幼馴染のままだ。光彦はそんなことを考えていて、つい歩美からの問いかけに遅れがちで返事をしてしまった。

「……光彦君、今日は何か変じゃない？」

案の定、察しのいい歩美が首を傾げて光彦を見る。

「そんなことないですよ！」

光彦は慌てて歩美から顔を背けると、コホンと咳き込む。

「風邪か？」

今度は元太が訊ねた。しめた、と光彦は閃いた。

「どうやらそうみたいなんです。最近調子が悪くて」

そう言い、光彦は更に2回咳き込んだ。そして、

「大事な試験前ですし、部活も休みなので今日はこれから病院へ行くと思います。なので僕は、今日はこの辺で失礼しようと思います」

「本当？ だったら心配だし、途中まで付いて行くよ」

歩美が心配そうな表情で言う。しかし光彦は、

「いいえ。お2人も試験勉強があるでしょう。風邪を移してしまうと悪いですから、僕1人で大丈夫です。ではまた！」

一気にまくし立てると、そのまま光彦は2人と別れ、小走りで交差点を病院方面へ向かっていった。

「……あいつ、本当に風邪かよ？」

走り去る姿はまるで元気と言わんばかりに見て取れる。元太は光彦が去った方向を疑いのまなざしで見つめていたが、歩美が首を横に振って

「さ、私たちは真つ直ぐ家へ帰ろ」

先程と変わらない笑顔を、元太に向けた。

歩美、元太と別れた光彦は、向かった先の路地を一つ二つ曲がり、病院を越えた別の通りに出て足を止めた。

「はぁ……はぁ……」

両膝に手をつき、前屈みになって地面を見つめる。  
肩を上下させてはいるが、呼吸はそれほど荒くはない。

「……不純な動機で始めたサッカーも、少しは役に立っているのか  
もしれませんね」

光彦はひとり呟いて、空を見上げた。

頭上では、どんよりとした厚い雲が空一面を覆っている。

光彦は外の空気を肺の深くまで吸い込むと姿勢を正し、再び通りを歩き始めた。

光彦が出た通りは、米花町の商店街が近い通りであった。  
道路を挟む左右に視線を向ければ、床屋や本屋、洋食屋が並んでいる。

幼い頃から歩き慣れた道ではあるが、齢を重ねるごとに街の様相は少しずつ確実に変化を遂げていた。例えば、昔歩美が通っていた美容室の跡地には現在、アンティークショップが入っている。既製品ではない一つ一つが手作りで味のある骨董品の数々は、どれも見る者の心を引くものばかりだ。光彦はさりげなく通学カバンを開け、内ポケットに入れたままにしてある包みに触れた。

『これ、哀ちゃんが付けたら似合うんだろうなあ』



そこには、先日、歩美に連れられて元太と共にこの店に入った時、歩美の言葉に引き寄せられるようにして二人に内緒で購入した、ブローチが入っていた。

『でも哀ちゃん。アメリカで色々あつて、日本にはもう戻れないかもしれないんだって』

光彦の手が包みから離れた。

『灰原さんが日本に來れないなら、僕らがアメリカへ会いに行けばいいですよ』

『……そうだね、光彦君。私たちが大人になったら、3人で一緒に会いに行こうね』

そう言った歩美の悲しげな表情が脳裏を過ぎる。自然と光彦の拳に力が入った。

「……あれ？」

歩く光彦の視線が喫茶店を捉えようとしたとき、脇道から喫茶店へと入っていく男女の姿が目にとまり、光彦は歩くのをやめた。反射的に通りの電柱に身を隠すようにして、光彦は男女の様子を観察する。

「……新一、さん？」

光彦が見たのは、見知らぬ女性と親しげに会話する工藤新一の姿であつた。

工藤新一は、かつて高校生探偵として世間を賑わせた日本警察の救世主である。

現在は東都大学文学部に所属する大学院生として学業に専念し、メディアへの極端な露出を控える一方、事件の依頼を受ければ探偵として様々な問題を解決すべく日々活動している。

光彦は毛利蘭という共通の知人を通じて新一と知り合った。光彦達より10歳年上の蘭は、新一と同年齢の恋人であるが、光彦達の帝丹小学校時代の友人である江戸川コナンが居候していた先の家族であった。

江戸川コナン。

その名前を脳内で口にして、光彦は苦笑いした。

コナンは光彦・歩美・元太らが少年探偵団として活動するきっかけを与えた、光彦にとって忘れることの出来ない人物である。灰原と同時期のタイミングで、彼女と同じく海外に住んでいる親元へと引き取られていった黒縁メガネの少年は、事ある度に新一から教わったという推理や事件に関する知識を披露していた。そのためか、光彦は新一を見るたびにコナンを思い出す。そして、自分は絶対的に彼には敵わないと思い知らされた日のことを思い出すのだ。

「新一さんは、コナン君ではないのに」

光彦が電柱の影から男女の様子を覗っていると、新一は隣を歩く女性をエスコートするようにして喫茶店の中へ入っていった。私服ではあるが、ラインの入った灰色の襟シャツにネクタイを締める新一は、実年齢を上回る大人の紳士的な雰囲気漂わせていた。また、

新一がエスコートする見知らぬ女性もクリーム色のスーツをラフに着こなし、高いヒールからすらっと伸びるスタイルの良い足が仕事に生きる大人の女性を演出している。

「……探偵の、依頼？」

二人が喫茶店内で席に付いたのを確認すると、光彦は二人に気付かれないように喫茶店の裏へ回り、その窓から二人の様子を覗いた。もし女性が新一に事件の依頼をしているのだとすれば、ひょっとしたら、新一を通じて自分も事件に関われるかもしれない。

コナンが居なくなつてからの光彦は、古今東西の推理小説を読み漁ると同時に様々な雑学系の知識を吸収していた。その努力の甲斐あつて、少年探偵団はコナン抜きでもちよくちよく地域で発生した小さな事件を解決してきた実績があつた。彼が居なくなつて以降、少年探偵団の頭脳として活動してきた光彦の好奇心が胸の内側で膨らんでいく。

それに光彦には、ある一定の確信があつた。

「新一さんには蘭さんが居ますし、女性と密会するなんてことはいはないはずですよ」

先ほども述べたが、新一には蘭という恋人がいる。付き合い始めてから数年が経過した現在も、その仲は睦まじいと光彦は記憶していた。たしかに新一は容姿端麗で探偵として周囲への認知度も高いことから、彼を慕うファンも多い。だが、彼自身はあくまで自身が認めた一人の女性だけと付き合うという点で、光彦は彼に好感を抱いていた。

しかし、そんな光彦の認識は一瞬で吹き飛ぶこととなる。

光彦が覗く店内で新一は、深刻そうな表情で女性と会話をしていた。女性は煙草を吹かしながら新一の話に耳を傾けている。しかし、新一が女性の隣の席に座ると女性は煙草の火を消し、新一に向き直った。新一と女性が少しの間、無言でお互いを見つめ合う。

そして次の瞬間

「あ、」

光彦は反射的に声を漏らしてしまい、慌てて両手でその口を塞いだ。

光彦の目の前で新一は女性を優しく抱きしめると、その女性の唇を自らの唇で塞いだのである。それは唇が触れるだけの簡易的なキスだった。

光彦は自分の目を疑った。

だがそれよりも光彦を動揺させたのは、その後の新一の行動だった。

女性とキスした後、新一の視線が真っ直ぐ光彦を捉えたのだ。

バレていた。

光彦は居た堪れなくなり、一目散に今まで来た道のりを引き返すようにその場を駆け出した。見てはいけなかった。見てはいけなかった。ものを見てしまった。

頭の中で警鐘が鳴り響く。

（新一さんは、僕が中の様子を観察していると知った上であの行動をとった）

それが意味するものは何なのか。考えようとするも、頭が思うように働かない。

揺れる光彦の鞆の中で、ブローチが入った包みがポケットから零れ落ちた。

走りながらにして光彦は思う。

新一が何をしていようと、自分には関係の無い話だ。自分は体調が悪いから病院へ向かっていたのであって、新一の行為を目撃してしまったのは偶然だった。第一、人影のない路地裏ならともかく、あそこは喫茶店。他の客が居る前であんな行為に及ぶからには、周囲に見られても問題は無いだろう。むしろ見られる可能性の中で行為に及ぶ必要があった、とまで考えてもいいはず、

「なんて、簡単に割りきれませんよね……」

光彦は肩を落とした。瞼を閉じて再生されるのは、ただ真っ直ぐに真実だけを見透かす碧色の瞳。去り際の新一の視線。不意に光彦は思い出した。

（……そういえば、彼も同じ瞳をしていた）

思うがままに来た道を走っていた光彦だったが、知らぬ間にその足取りは元の道を外れ、隣の杯戸町まで来ていた。

「今日はやたらと走る日だなあ……」

走ることと冷静さを取り戻した光彦は、自分の言動を棚に上げて力なく笑う。

「全く、大事な定期試験前に何やってるんでしょうね」

学校を出てからいい加減、陽も傾いている。

早く帰らなければ、親もうるさく言ってくるかもしれない。

教育に厳しい母親の顔を想像すれば、自然と気が重くなる。光彦はため息をつく、大人しく帰路に着くことを決意した。そして米花町の方を振り向いたその時。

シルバーにカラーリングされたシルバーフォーリングスのセダンが、ハザードランプを点けて光彦の右横に止まった。都内でも一部の高級住宅街のある地域でしかお目にかかれない高級車。何事かと光彦が車を眺めていると、左側の窓が開く。

「よお、光彦」

そこから顔を覗かせたのは、新一だった。

逃げ出したって現実はいつも自分の前に居て、振り返れば真実が待っている。

「……新一さん」

真横に止まる高級車から覗かせる顔。光彦は顔を曇らせながらは車内を覗いた。

どうやら車内は新一ひとりだけのようだ。光彦は胸を撫で下ろした。

「帝丹中からの帰り道だろ？自宅まで送るよ」

新一が言う。その言葉に光彦は一瞬だけ新一の顔を見たが、すぐに視線を逸らした。

「……いえ。折角ですが、今日は歩きたい気分なので」

「そうか」

新一が苦笑する。これほど白々しい言葉も無い、光彦は舌打ちした。

目の前の青年は、ここが帝丹中学校から自宅と逆方向の杯戸町であることに気付かないわけがない。ましてや先ほどの喫茶店の一件、自分を送るという目的は口実に過ぎないことは明白であった。

（新一さんは、僕を何だと思っているんだ）

声を掛ければ喜んで車に乗り込むと思っているのか。そうだ、歩美や元太ならまず間違いないそうしただろう。阿笠博士の家に行けば時折顔を出して、気前良く相手をしてくれる新一を歩美は兄のよう



に慕っているし、元太もまた勉強や運動面で新一の世話になっており頭が上がらない。でも自分は違う。

目の前の青年を、素直に信用出来ない。

「さっき俺が会ってた女」

光彦が立ち尽くしている僅か時間の後、新一が呟いた。

光彦は思わず顔を上げた。新一は真っ直ぐ光彦の目を見つめている。

「誰なのか、知りたくないか？」

その目線が、先ほど喫茶店で自分に向けられた目線とオーバーラップする。

「あ……」

耐え切れず、光彦が声を上げると、新一は口元を吊り上げ笑みを浮かべた。

しまった。光彦は後悔したが、時はすでに遅い。

「乗れよ」

再度、新一が声をかける。

鼓動が耳のすぐ側で聞こえる。光彦は唾を飲んだ。

『コナン君。どうすれば金庫の中にあるリングを取り出せると思いますか？』

『扉を開ければ、いいのさ』

このままドアに手をかけてしまえば、真相に辿りつけるのだろうか。

光彦は新一の車の後部座席のドアに手を触れようとしたとき、新一の尻ポケットから単純な電子音が断続的に聞こえてきた。新一は後部座席のドアロックを解除すると、尻ポケットに入れた携帯電話を取り出し、通話に出た。

「はい、工藤」

車に乗り込もうとドアを開けた光彦の意識が、自然と新一の会話に向く。

「ああ、蘭か」

光彦は驚いて新一の顔を見た。

新一は口元に笑みをたたえたまま、目を細めて遠くを見つめていた。

「俺はこれから杯戸港に寄ってからそっちに向かうから」

「大丈夫、約束を破ったりはしねえよ」

光彦には理解出来なかった。先ほどまで違う女性と密会していたというのに、目の前の青年は今、恋人との通話に柔らかな笑顔を浮かべている。約束は破らないと新一は言ったが、先ほどの喫茶店での行為。それは蘭への裏切りではないのかと疑問に思う。

光彦は新一に訊きたかった。  
真剣な表情で女性に歩み寄る姿。優しく抱いて口付けする新一の姿が何度も蘇る。

（キスって言うのは、愛する女性に対してするものじゃないんですか）

衝動的に新一を攻め立てたくなる気持ちを抑え、光彦は深く息を吸い込んだ。

「それじゃ、今夜はよろしくな」

携帯が閉じられる。改めて新一が光彦を見ると、光彦はドアを開けたまま後部座席に座っていた。通学カバンを膝の上に置き、足元のシート一点を見つめている光彦。

新一はそこで初めて怪訝な顔を見ると、大げさに息を吐き出し、何かを悟ったかのように小さく笑った。

「ドアを閉めたら発進するぜ」

新一はフロントを向くと、チェンジレバーを操作して車を発進できる状態にした。

「行き先は光彦の家でいいよな」「……これから」

新一が言うのと同時に光彦が俯いたまま口を開いた。

バックミラー越しに工藤が首を傾げて見せようとすると、光彦は顔を上げ、

「これから、杯戸港に向かうんですか？」

新一は頭を掻いた。

「光彦の家に行くよ。……杯戸港は、蘭に対する口実だ」

「口実？また、蘭さんに嘘をつくんですか？」

「……あのなあ。俺が急に光彦の家に行くなんて告げたら、蘭が心配するだろ？あいつ今は帝丹中の非常勤講師だし、あらぬ詮索をされたら光彦も迷惑じゃないのか」

「僕？僕は迷惑なんてしませんよ。やましい事なんて一つもありませんし。第一、詮索されて困るのは新一さんのほうじゃないですか」

そうですね。実は僕の家に行くという話のほうが口実で、新一さん、杯戸港で僕を口封じする気なんでしょう！？」

ヒートアップするように光彦の声が大きくなる。

停車している通りを歩く通行人は、光彦の声に何事かと皆、新一

の車を向いた。

オイオイ……、新一は心の中で肩を落とした。

「どうして俺が光彦の口を塞がないといけないんだ？」

「そ、それは……」

光彦が口ごもる。

新一は心の底からため息を吐いた。チェンジレバーをパーキングにシフトして、サイドブレーキを引く。ブレーキから足を離すと、新一はシートに体重をあずけた。二人の間に2、3秒ほどの沈黙が流れる。

「ああ、でも、それも悪くないかもな」

唐突に、新一はこれまでの自分の言葉を丸々と引つ繰り返した。

「え？」光彦の眼の色が変わる。

「お前を口封じするのも悪くねえなって言ったのさ。事件の一部始終をお前に見せることでお前を共犯者に仕立て、今日の出来事を一切口外させない……そんな口封じの方法を取るのも、な？」

新一は腹の上で手を組むと、瞳を伏せる。嫌な空気を光彦は肌で感じた。

（何を考えているんだ、この人は）

堪え切れなくなり、光彦は新一の顔を見ようと身を前へ乗り出した。しかし、座席に深く座り込む新一の顔はバックミラー越しにも確認出来ず、その表情を知ることが出来なかった。

「やっぱり、歩いて帰ります」

光彦は鞆を乱暴に掴むと車を降りた。気づけば開いたままになっていた鞆のチャックを閉める。光彦はドアを閉める際、再び新一の顔を見た。新一は瞳を伏せ、何かを考え込んでいるようだった。何か後ろ髪が引かれるような気もしたが、光彦は結局何もせずその場を後にした。

「あいつ、想像以上に疑心暗鬼に陥ってるな」

光彦の足音が去ったのを確認すると、新一は顔を上げ、呟いた。

新一が喫茶店で会っていたのは刑事だった。杯戸港で発生した強盗殺人事件の犯行グループについて情報交換している最中にグループの重要参考人が偶然通りがかり、喫茶店内へ逃げ込んだところを相手も同じ喫茶店へ入り、面が割れることを恐れた刑事は新一を利用して顔を隠したのだった。光彦が見たのは、新一と刑事の一部始終。強盗殺人事件については新聞やテレビニュースでも連日報道されているが、重要参考人までは当然報道されるわけもなく、光彦がその存在に気づいているはずもない。

真相を語るのは簡単だが、光彦のあの様子だと言ったところで納得はしないように感じられた。何よりも、先ほど新一の姿を見つけ

るや否や、自分達を尾行して様子を覗っていた光彦のことだ。事件のことを話して下手に首を突っ込まれても厄介だ。

（今回の犯行グループの手口からして、素性がばれた相手には手加減が無い）

新一は過去、興味本位に事件に関わって痛い目を見た経験がある。光彦のように、自分が気にかけている子供が同じ好奇心に唆されて自分と同じ過ちを繰り返すのは避けたいところだった。

それにしても。

「このままじゃ俺、完全に女つたらしの浮気者じゃねえか……」

新一は頂垂れた。下手な話、今日の出来事がそのまま光彦視点で蘭に伝わったらどうなることか。想像した新一は身震いして、自分の脇腹をさすった。蘭には早いうちに、自分の口から伝えよう。

「……目の前の事実」真実とは限らない、か」

自分がそれに気づいたのは、いつ頃の事だっただろう。

数分後、新一は車を発進させた。

後部座席に忘れられた光彦の置き土産には、まだ気付いていない。

「おはよう」

次の日の朝。1年B組にある自分の席に座ると、先に登校していた歩美が寄ってきた。光彦が重たい瞼を擦りながら生返事をする、歩美が心配そうな顔を向ける。

「光彦君、風邪大丈夫だった……？」

「……昨日は2人と別れた後に色々あって、結局病院へは行けませんでした」

真実半分に言葉を濁す。実際、昨日の光彦は新一と別れた後も色々あった。日が暮れてから自宅へ帰れば、玄関先で受けた母親のきつい説教。部屋へ戻れば放課後の出来事がフラッシュバックし、布団に潜れば悪夢に魘された。人が見る夢は昼間の記憶の整理と言うが、ここまで自分の精神状態を反映した夢を見るのも、光彦は初めての経験だった。

「……あのね、光彦君」「オーッス！おはよ！！」

何かを言いかけた歩美の言葉は、光彦の背後から現れた元太の挨拶にかき消された。

「光彦、風邪は治ったか？」

光彦が呆れた表情で振り返る。

「……元太君。風邪はそんなに直ぐには治りませんよ」

「そうかー？病は気からって言うだろ」



元太は口笛を吹く、光彦はため息を吐いた。

「あ、それで歩美ちゃん。僕に何か話があったんじゃない……」

歩美が何か言いかけたことを思い出した光彦が訊くと、歩美は頭を左右に振って、なんでもないよと笑顔を作った。代わりに元太が、

「そつえば歩美、今日は新一ちゃんの家に行くんだろ？」

どうして現実には物語のように単純に針を進めてくれないのだろう。  
光彦は視界が暗転する錯覚に襲われた。

「…………え？」

光彦が歩美を見上げると、歩美は恥ずかしそうに顔を赤らめ、

「違うよ元太君。新一お兄さんの家じゃなくて歩美の家だよ」

「……………どういことですか？」

光彦が訝しげに問うと、歩美は顔を赤らめたまま、

「ほら、試験が近いでしょ？昨日元太君と相談して新一お兄さんに  
電話したんだ。そしたらね、今日歩美の家で数学の勉強を教えてく  
れることになったの」

「俺も数学で分からないところあるから、新一兄ちゃんに教わるんだ  
ぜ」

自信満々に元太が言うと、歩美が笑った。

「元太君、この間の数学の小テストの点数、赤点だったんでしょ？」  
「だから教わるんじゃない？新一兄ちゃん、勉強教えるの上手いし」

「いけませんよ！」

光彦は声を荒らげた。歩美と元太は会話を止めて光彦を見た。

「……………何でいけないの？」

悲しげな瞳で歩美が光彦を見つめる。光彦は視線を逸らした。

「え、だって、その……あ、ほら！新一さんも警視庁とのお仕事が忙しいでしょうし。それに……分からないからって気軽に他人を頼りにするのは良くないですよ。いくら数学の問題が難しいと言っても、問題自体は僕らが習った範囲の中から出題されている訳ですから、僕らにも自力で解ける可能性があるわけです。その可能性を他人任せに潰してしまうのは、勿体無いと思いませんか？」

「それは、そうだけど……」

歩美が語尾を濁す。すると、光彦はそうでしょう、と口調を強めた。

「歩美ちゃん、勉強なら僕が教えます。何処が分からないのか言ってください。僕が答えられる範囲で精一杯お教えしますから」

「……新一ちゃんとはダメで、光彦ならいいのかよ」  
怪訝な顔をして元太が言った。光彦は慌てた。

「あ、だから、僕は少しでも新一さんの負担を減らそうと……」

「……光彦君、私達が新一お兄さんの負担だって言いたいのか？」

歩美がポツリと呟いた。

歩美の呟きに、光彦が再び歩美を見た

歩美は瞳を潤ませながら、光彦を睨んでいた。

「確かに迷惑かけることにはなっちゃうけど、新一お兄さんだって忙しいならちゃんと歩美に、今は無理だって言ってくれるもん」

「あ、いや、だから……違います、歩美ちゃん」

「光彦くんは頭が良いから、歩美にとって難しい問題でも、きっとすぐに解いちゃうよね。私だって毎日勉強してる。昔は解けなかった問題も、今は自力で解けるってこと、いーっぱいある。けれど、応用の最終問題くらいになると、いくら考えても分からなくて、悔しくて、情けなくなっちゃうことがあるの。……光彦くんには分からないよ！」

歩美が叫んだ。クラスメイトの会話が止まり、教室が一瞬静まり返る。光彦は慌てた。

「歩美ちゃん、僕の話聞いてください」

「もう、光彦君なんて知らない」

光彦の言葉を歩美は受け入れなかった。

歩美は自分の机の横に掛けた通学カバンを手に取ると教室を飛び出した。

「ちょっと、歩美ちゃん！」

誤解された。慌てて光彦も後を追おうと鞆に手をかける。  
しかし、それを元太が遮った。

「光彦。お前、何やってきたんだよ」

元太の発言の意図がわからず、光彦は首を捻った。

「え……元太君。言っている意味が分かりません」  
「お前、少年探偵団の一員じゃねえのか」

元太は続けた。

「今まで俺たち、頼って頼られて、助け合ってきたんじゃないのかよ」

「だから今回のような勉強面でも、僕は少年探偵団のメンバー内で助け合おうと」

「……お前、コナンが居なくなってから、変わったな」  
それだけ言っと、元太は走って教室の扉を抜け、歩美の後を追っていった。

「ちょっと元太君！」  
思わず光彦が立ち上がる。

気がつけば、クラスメイト全員の視線が光彦に集まっていた。

「あ、いや……」  
光彦がクラスメイトに視線を向けると、クラスメイトは次々に光彦から視線を反らした。

光彦は何か言いたかったが、その衝動は始業のチャイムによって

遮られた。それまで教室内に散らばっていた生徒は自分の席に戻ると、それぞれ授業の準備に取り掛かる。

一時間目は社会。

文系なのに白衣を着込んだ白髪混じりの中年教師が、教室の扉を開けた。

起立、日直の号令で全員が席を立つ。

（ああ、今すぐにここから居なくなりたい）  
教室に取り残された光彦はやり場のない気持ちを抱えたまま、ひとり一時間目に臨んだ。

「え？光彦？」

新一が蘭からの電話に出たのは、彼が大学の研究室内に設けられたゼミ室のテーブルで研究資料片手に昼食のサンドイッチを頬張っていた時のことだった。

「電話ですか？」

共に昼食を食べていたゼミの後輩が訊いた。

新一は罰が悪そうな顔をする。一瞬携帯を耳元から離し、

「悪い。論文の添削の件は昼食後に聞くから、また後でな」

新一は席を立つと、ゼミ室を抜けて研究室の外に出た。

『ちょっと新一、聞いてる？』

携帯の音声出力の部分から、蘭の声が漏れて聞こえる。

「はいはい、ちゃんと聞いてますよー毛利先生」

新一は携帯を再び耳元に当てた。

「それで、光彦がどうしたって？」

『昼休み前に教室から居なくなったらしいの。光彦君、普段はとっても真面目だし、授業を途中で抜けるような子じゃないから気になつて』

「保健室に行ったりはしてないのか？」

『来てないって。それでね、新一。実は光彦君、今日の朝に歩美ちゃんや元太君と喧嘩したみたいなの。一時間目が始まる前に、歩美ちゃんが泣きながら私のところに来て』

「それで？」

『付き添いの元太君に話を聞いたら、今日新一に勉強を教えて貰うって話をしてて喧嘩になったって言うから』

「ああー、なるほどね」

新一は空いた方の手で前髪を掻き上げた。

昨日彼女に隠れて女性と密会してた男が、今日は同級生、しかも幼馴染の女の子の家に行つて勉強を教えようって言うんだから、光彦が躊躇うのも無理は無い。

（けれど、それが原因なら光彦はまず俺の所には来ないだろうな）  
新一は思う。しかし、昨日の詳細を知らない蘭は、少しでも光彦の手がかりを掴もうと懸命だ。

『新一、昨日光彦君に会ったんでしょ？何か変わったところ無かった？』

「変わった点、か」

新一は顎に手を当て、下を向いた。

（思い当たる点は山ほどある。が、これを蘭に説明すれば光彦は  
）

ひとりそう心の中で呟いたところで、新一は今朝、ジャケットのフアスナー部分に入れた小さな包みの存在を思い出した。それは、昨



日光彦と別れてから蘭と待ち合わせをしていた東都国際空港に向かった後、駐車場で新一が後部座席の掃除をしていた時に見つけたものだった。

ふと新一の脳裏にある考えが浮かんだ。

「……なあ、光彦の家には連絡入れたのか？」

『ううん。まだ入れてない』

「そうか。良かった」

蘭の返事を聞くと、新一は安心したように微笑んだ。

「蘭の電話で思い出したよ。俺、今日は昼に光彦と会う約束してたんだ」

『え、本当？』

蘭は驚きの感情をそのまま声に出した。新一は平生のまま答える。

「光彦の話だと、授業は午前中で終わるって聞いてたからOKした  
んだけどな」

『嘘。だって新一、先に歩美ちゃん達と夕方に約束を』

言いかけた蘭の話を、新一は遮った。

「いいから。そういう事にして、俺に任せとけて」

そして新一は再び研究室の扉を開けると、廊下から室内に入った。

「蘭、今日は何時に仕事終わるんだ？」

『今日の午後は授業担当も無いし、15時には帰れると思う。……  
例の件もあるし、暫くは新一の家に泊まるってお父さんにも言っ  
てあるから、時間は少し早いけど、今日は仕事終わったら直接新一の  
家に行くね』

「助かるよ」

通話状態のままゼミ室の前まで戻ると、昼食を食べ終わった後輩  
がテーブルでコーヒーを飲んでいた。新一が部屋の扉を開けると、  
顔を上げた後輩と視線が合う。

「あ、夕飯は19時頃がいいな。サラダとかコロッケとかちよいち

よいつまめるヤツで」

携帯片手の新一が言うつと、目の前の後輩は気まずそうに視線を逸らした。

『ちよつと新一、調子に乗ってない？』

後輩の前で電話していることを知らない蘭は、普段のノリのまま通話を続けている。

蘭の苦言に新一は目を丸くすると、軽く咳払いし、

「いつもありがとな、蘭」

愛する人にしか向けない慈しみに満ちた低音で、囁いた。

『……バカ』

蘭との通話が切れると、新一は何事も無かったかのように再び元のテーブルについた。後輩に向き直り、食べかけていたサンドイッチに再び齧り付く。すると、心なしか顔を赤くした後輩が小さな声で「彼女さんですか？」と聞いてきた。

新一はニヤリと微笑むと、

「今は婚約者、かな」

左手を後輩に向けた。薬指には、シンプルなデザインのリングが光っている。

「まあ、結婚するのはもう少し先だけだな」

ため息を吐く後輩を尻目に、新一はサンドイッチの最後の一口を口に放ると再び席を立った。椅子に掛けたジャケットに袖を通すと、机の研究資料を鞆に仕舞う。

「これから出掛けるんですか？」後輩が訊いた。

「ちょっと急用が出来てさ。直ぐ戻るかもしれないけど、ひよつとしたらそのまま帰るかもしれないから、論文の添削は外でやるよ。」

今日は何時まで研究室に居る？」

「論文の締切りが近いので、19時までは残ります」

「それじゃ、研究室の俺のパソコンに論文のデータをコピーして入れておいて貰えるか。そうしたら、17時までに添削して部屋のメインアカウントに転送するから」

新一が指示を出すと、後輩は表情を引き締めた。

「分かりました」

後輩の返事に頷くと、新一はまとめた荷物を肩に担ぎ、研究室を後にした。

失った物を今更取り戻そうとすることに、如何程の価値があるだろうか。

失って初めて、それが大事なものであったことに気がつくことはよくある。失う前からそれが大事なものと分かっているても、手放さなければならぬ運命もある。

運命。

「己の思考を中断させる、都合のいい言葉だな」

自販機で購入した缶コーヒーを片手に、新一は東都大正門前のオーブンテラスに座っていた。正面のテーブルには外での作業用に使用しているモバイルパソコン。開かれているのは先ほど研究室で別れた後輩の論文だった。『人の運命』という事柄について淡々と論じられた書面に目を通すその視線は、時折テラス脇に設置された屋外時計との間を行き来する。先ほど光彦にメールを送信してから数分が経過したが、返信はまだ来ない。

\* \* \*

帝丹中を抜けた光彦は、東都大キャンパスを目指して走っていた。それが無いことに気がついたのは、4時間目の体育の授業の時。体育館に向かう生徒の波に紛れて、光彦は裏門から抜け出した。昨日新一が密会していた喫茶店から新一の車に乗り込む間に無くなった。光彦は早速昨日の道のりを探したが、包みは見つからなかった。とすれば、残る可能性はただ一つ。

新一の車に包みを忘れた。

光彦は制服のポケットから携帯電話を取り出した。授業中はOFFになっている電源をONにすると、数秒後に数件のメッセージを受信した。普段は放課後に一件あるかないかのメールだが、今日に限っては例外であった。理由は明白であるが、

「現金な人たちですね……」

光彦は苦笑してメールを削除した。

すると、その数秒後に再びメールの着信。光彦が再度受信箱を開くと、そこには

『捜し物は見つかったか？ 工藤新一』

光彦は舌打ちした。自ら連絡を取る手間は省けたが、気に入らない文面だ。包みを持っているなら素直に『預っているから取りに来い』くらいの内容を送信すればいいのだ。それをわざわざ『捜し物は見つかったか』などと、他人をおちよくるような表現にして、人の斜め上を行こうとする。そうだ、工藤新一とはこういう人間なのだ。光彦は一瞬躊躇ったが、返信ボタンを押して内容を一気に入力すると、新一に向けて送信した。そして再び携帯の電源を切る。

「新一さんの思い通りにはさせません」

光彦は東都大キャンパス目指して走り始めた。

光彦が東都大キャンパスの正門に到着したのは、新一にメールを送って20分後のことだった。杯戸町の喫茶店から走り続けて額から滲み出た汗をハンカチで拭う。

講義終わりの学生だろうか、正門周辺は東都大生が絶えず出入りを続けている。中には学内の施設を利用するのか、子供連れの主婦や一般人の姿も見受けられるが、平日の午後に制服姿の中学生は浮いた存在らしく、光彦は時折通行人に不思議な目で見つめられている。その視線に気づいた光彦は、都合よくキャンパス内のオープンテラス横にあった木の茂みに身を隠すと、携帯電話の電源を入れた。すると次の瞬間、

「予想より早い到着だったな」

左頬に突然冷たい感触が走り、光彦は思わず右へ飛び退いた。

そして元居た場所を無言で睨む。そこには缶飲料を手に持った新一が立っていた。

「……新一さん」

「運動後はアイソトニック飲料に限るぜ」

新一は苦笑しながら光彦に飲料を手渡す。光彦は無言で受け取ると、プルタブを引いて口を付けた。結構な距離を走ったせいか、光彦の乾いた喉は、缶の中身を一気に体内へ流し込んだ。体内の熱が下がりゆくを感じる。

「東都大キャンパスまでずっと走ってきたのか？結構な距離だったろ」

飲料を一気飲みする光彦に微笑みかける。すると、飲み終えて一息ついた光彦は、

「今日は走りたい気分だったので」

空になった缶を新一向かって投げた。近距離での出来事に新一は驚いたが、自然な動作で空き缶を受け取ると、そのままテラス脇のゴミ箱へ投げる。カランと高い音を立て、新一が放った空き缶はゴミ箱の中に収まった。

テラスの茂みが風に揺れ、木々が擦れる音が聞こえる。その音を背に、目の前の青年は不敵な笑みを浮かべて中学生の少年の前に手を差し伸べていた。光彦は、これが映画のワンシーンであればいいと思った。しかし、後戻りすることは、もうできない。

「それじゃあ、約束のドライブと洒落込もうか」

そう言うと、新一は正門に向かって歩き始めた。

『昨日は取り乱してしまい、すみませんでした。宜しければ今日の昼、東都大で新一さんの車に乗せていただだけませんか？話さなければならぬこともありますので』

新一の背中を追いながら、光彦は先ほど新一に当てたメールの文章を反芻した。

大丈夫だ。今のところ不備はない。

新一の一步後ろについて東都大正門を出て西に出る。途中すれ違う通行人のうち数名が新一の顔を見てはっとした表情をしたが、すぐに俯いてやり過ごした。大学入学と同時に学業宣言を出してメディア露出を控えるようになった新一だが、やはり全盛期であった高校生探偵の華やかな経歴は世間の記憶から消されることの無いもの



なのだろうか。

そんなことを考えていると、やがて光彦は10台程度が駐車できる月極駐車場に辿り着いた。見回せば、昨日見かけたシルバーフォーリングスが駐車場の左脇に停めてある。新一は自家用車であるシルバーカラーのその車に向かって直線に歩くと、運転席のドアに鍵を差し込んだ。

「助手席と後部座席、どちらがいい？」

それは、身内として乗るか、客人として乗るか、どちらかを選べということだろうか。

「……差支えなければ、助手席をお願いします」

少し迷ってから光彦が答えると、新一はクスリと笑い、運転席へ乗り込んだ。光彦が助手席のドア前へ向かうと、新一は車内で助手席に置いてあった荷物を後部座席へ移していた。

「普段隣には研究資料しか載せていなくてさ。少し散らかっているが、我慢してくれ」

光彦がドアを開けると、新一が言った。光彦はいえ、と小さく答えると、空いた助手席へ乗り込み、シートベルトを締めた。

「行き先は杯戸港でいいな？」

その問いには答えない。新一は無言で車のエンジンをかけるとサイドブレーキを戻し、杯戸港に向けて車を発進させた。

新一の車内はエンジンによる振動も少なく無臭で、生活感をまるで感じさせない空間だった。新一自身は汚れているからと助手席を整理していたが、実際はカバンと書類の入ったクリアファイルが数点置いてあっただけで、とても乱れていたふうには思えなかった。探偵は、わずかな痕跡をもとに当該する人物像を推理するものと心得ているが、目の前の人物は常日頃、他人に自分の私生活を悟られないようにしている節がある。それは探偵という職業をよく心得ているが故の、自己は他人にその絶対領域を侵略されないための防護策であるのか。

（少しくらい、中身が知れているほうが人は安心するものなのに）

「昨日は意地悪して悪かったな」

光彦が、窓の外を過ぎてゆく景色を眺めながらあれこれと考えにふけていると、運転席の新一が突然、口を開いた。大きな交差点の手前。信号が赤になり、車は左車線でウインカーを出して停車する。光彦は新一を見た。

「……いえ。僕の方こそ、昨日はすみませんでした」

光彦は努めてしおらしく返事をした。

「昨日の女性、どうせ刑事なんでしょう？ 捜査の途中だったんですか？」

「ああ」新一は頷いた。

「杯戸港で強盗殺人事件が起きたことは知っているか？」

「え、ええ。新聞やニュースで報道されている範囲なら。高級マン

シヨンの一室に押し入った犯人が室内に居た女性ごと家の資産を奪い、杯戸港の廃倉庫で女性と、犯行目撃者を惨殺した事件ですね。そういえば、昨日犯行グループ全員が捕まったって」

前方の信号が青になった。

新一がステアリングを左に回すと、車は商店街のある華やかな通りに差し掛かった。

「なあ」

「何ですか？」

「お前、灰原のこと今でも好きか？」

光彦は自分の頬が熱くなるを感じた。……歩美達から聞いたのだろうか。

駄目だ、動揺してはいけない。光彦は両手を握りしめた。

「灰原は今、どんな格好でどんな暮らしをしていると思う？」

「……砂糖と塩」「え？」

「……歩美ちゃんから、たまに灰原さんの話は聞いています。先日は寝ぼけてココアに塩を入れてしまったって、歩美ちゃんが言っていました」

「……そうか」新一は微笑んだ。

やがて、光彦を乗せた新一の車は杯戸港の倉庫街に入った。

同じ形状をした倉庫がいくつも並ぶその中に、警察の立ち入り禁止のテープが貼られた区画があった。そこにパトランプをつけた警察車両も数台停まっていることから、ここが先日的事件現場であることは初見の光彦にも容易に想像できた。

「降りるぞ」

駐車してある警察車両に並行するように新一が車を停めた。シートベルトを外し、エンジンを切ってドアから車外に出た新一につられるように、光彦もまた車外に出た。程よく冷たい潮風が頬に当たって気持ちがいい。

「名瀬刑事」

場違いに背伸びして深呼吸する光彦を尻目に、新一は立ち入り禁止区域の内側で現場検証を進めている女性刑事に声を掛けた。名瀬と呼ばれた刑事は、両手にグローブをはめ、手際よく部下に捜査の指示を与えている。長い茶髪を後ろで一つに束ね、灰色のパンツスーツに高いヒール・パンプス。凜とした容姿に、光彦は昨日喫茶店で新一が会っていた女性を思い浮かべていた。

「ああ、工藤君」

名瀬は新一の姿を認めると部下に相槌をして、立ち入り禁止のロープを潜り抜けた。

「どうしたの？今日は捜査協力の依頼を出していないけれど」

「今日は私用で来ました」

新一が光彦に視線を送る。新一の後ろで現場を見回していた光彦は我に返ると、新一の横へ来て名瀬に頭を下げた。

「帝丹中1年の円谷光彦です。今日は新一さんの案内で来ました」

「あら、貴方が噂の円谷君？」

「噂？」新一が訊くと、名瀬は苦笑しながら、

「私は今日が初対面だけれど、彼、街でひったくりや痴漢事件なんかが起きたときに現場に居合わせて、よく犯人確保に協力してくれるらしいの」

「へえ」

少し驚いた顔で新一は光彦を見た。光彦は反射的に顔を反らす。

名瀬はそんな二人の様子で、

「先入観に囚われない中立的な意見で誤認逮捕が激減したって聞くわ。工藤君の知り合いだったのね」

「ええ。それで名瀬刑事、実は……」

新一は名瀬の耳元に手をやると、光彦に聞こえないように内緒話を始めた。最初は真剣な表情で新一の言葉に耳を傾けていた名瀬だが、やがて笑い声を上げて、

「そうだったの？それは悪いことをしたわね」

どうやら昨日の喫茶店の件を話しているらしかったことが分かり、光彦は居た堪れない気持ちになった。これでは完全に新一のペースである。

「あの、誤解をしてしまったことは謝ります。けれど新一さんも人が悪いですよ。僕の顔を見ながら刑事にキスするなんて」

やはり喫茶店の女性は彼女だった。光彦がふて腐れると、名瀬は新一から離れて、

「まさか貴方に見られているとは思わなかったわ。ごめんなさい」

「それじゃあ、光彦の誤解も解けたところで僕らは失礼します。光彦を連れて少し現場に入りますが、よろしいですか？」

「貴方が一緒なら構わないわ。また現場を出るときに声をかけて頂戴」

「分かりました」

ひと通り会話を終えると、新一達は名瀬から離れ、倉庫の裏へ向かった。

倉庫に挟まれた薄暗い倉庫裏の通路は、先日殺人事件が起きたせいもあり、昼間にも関わらず不気味さを感じさせる。光彦は無意識のうちに両手を身体の前で組んだ。

新一の向かう先には、簡易的に設けられた献花台があった。菊の花や、鎮魂を意味する花言葉をもつ花束が並べられている中に、白く真新しいトゥシューズが置いてあるのが目に留まった。被害者の女性はバレリーナだったのだろうか。光彦は考える。

新一は献花台の前で立ち止まると、両手を合わせた。隣に居た光彦も慌てて両手を合わせる。

僅かな時間、静かな祈りが捧げられた。

杯戸港から米花町へ向かう帰りの車内は、新一が音楽再生用HDDの再生ボタンを押したことにより、静かな洋楽が流れていた。東都大のキャンパスからの新一の態度次第で、光彦は杯戸港で新一と対峙するつもりでいたのだが、そのような毒気はもはや何処かに消え失せていた。結局、自分は隣に座るこの青年に敵わないようだ。

（いや、そもそも高校生の時から日本警察の救世主なんていう異名を持っていた時点で、対等に渡り合うことなど不可能だったに違いない）

頭に激っていた血の気が引いて冷静さを取り戻せば、そこに自虐的な考えが駆け巡る。光彦はため息を吐くと、新一を向いた。

「ん？」

視線に気づいた新一が鼻を鳴らす。

「どうして……急に灰原さんの話をしたんですか？」

新一は右手でハンドルを握ったまま、左肘を窓枠につき、頬杖をついた。

「僕が落としたプレゼントから推理したんですか？でも、プレゼントなら歩美ちゃんという可能性も、あったはずです。新一さんは、どうして僕が――」

灰原さんに片想いしているって、分かったんですか。

「別に、推理はしてねえよ」

お前のことは推理するまでもない、と言われたのだろうか。むっとした顔で光彦が新一を睨むと、新一は肩を竦めた。

「光彦。たしかに『工藤新一』は探偵だが、何も四六時中探偵をしているわけじゃない。本業は大学院生だし、講義をサボってスタバへ行けば、好きな女のことを考えて健全な妄想に走ることもある」

「……講義サボって、スタバで妄想してるんですか」  
「バー口、喻え話だ」

信号の間隔が広い直線コース。新一は頼杖をとりてハンドルを握り、片手でギアチェンジすると、アクセルを踏んで車体を加速させた。BGMがエンジン音と走行音かき消されていくのと同時に車内に慣性が働き、身体が背もたれに押し付けられる。

「お前はいつも俺を『探偵・工藤新一』として見たがつているみたいだな。だけど　俺はお前が思うほど推理や計算で生きてる人間じゃないぜ」

前方の視界が狭まり、窓の外を流れる景色が尾を長くする。前方車両との感覚が縮まれば、新一は右にウィンカーを出してその車両を追いぬく。後方でクラクションが鳴った。

「新一さん、法定速度！」

メーターを見た光彦が叫んだ。加速のいい新一の車は、制限速度をゆうに越えていた。しかし、新一は車の速度を落とそうとしない。それどころか、隙があれば更に加速しようという雰囲気さえ漂わせている。

「楽しもうぜ、光彦。あれこれ考えて悩む人生を送るのもいいが、たまには思うがままに行動しようぜ。それで思いつき後悔した後、全てを笑い話に変える　そんな生き方をしてみないか？」



「新一さん、信号！赤ですよ！！」

今度は前方を見て叫んだ。すると新一は素早くギアをシフトしてブレーキを踏み、車体を停止させた。今度は身体が前方に振られ、光彦はシートベルトに受け止められた。新一は舌打ちすると、悔しそうに頭を掻いた。

「あと少しで行けると思ってたんだけどなあ」

「もう！あなたって人は、本当に」

探偵なんですか。そう言いかけて光彦は、はっと口をつぐんだ。

新一は、笑っている。

「光彦。ダッシュボードを開けてくれないか」

新一は右手で助手席の前方にある物入れを指さした。恐る恐る光彦が開けると、そこには昨日光彦が無くした包みが入っていた。そっと手に取ると、何故だかとても懐かしい感じがして、光彦は無意識のうちに包みを胸に抱き込んだ。笑ったまま、新一が光彦に告げる。

「これから灰原に会いに行くぞ」

信号が再び青になる。新一はエンジンをふかした。

これから彼女に会いに行く。

心拍数が妙に高いのは、先ほどの新一の乱暴な運転によるものだけではないことを光彦は理解していた。意識し始めた途端に乾き始めた喉を鳴らし、光彦は手中の包みに視線を落とした。

『これ、哀ちゃんが付いたら似合うんだろうなあ』

『でも哀ちゃん、アメリカで色々あって日本にはもう戻れないかもしれないんだって』

『私たちが大人になったら、3人で一緒に会いに行こうね』

歩美の言葉が回想される。

「新一さんは、灰原さんの居場所を知っているんですか？」「ああ」  
「まさか、これからアメリカへ行くなんて言いませんよね」

返事がない。

「行き先は東都国際空港ですか？」「いいや」

からかわれているんだろうか。

平常運転に戻り、車内にBGMが戻ってきた。繊細かつ退廃的な世界に突如突き抜けるようなメロディが印象的なブリティッシュ・ロック。聞き入るうちに、今の自分が置かれている状況を忘れそうになって、光彦は頭を左右に振った。

再び会話が無くなり、座席の背もたれ部分に身体を預けた光彦は、横の窓を眺めた。海沿いで殺風景だった街並みは、いつの間にか華やかな米花市の繁華街に変わっていた。建設時、後世のことを無視した行き当たりの都市設計がされたのか、此処ら一帯は高層ビルが無規則に立ち並ぶこの区画は、昼間でも日の当たらない部分が多く、それが理由かこの街は日夜犯罪が絶えない。目暮警部や高木刑事など警視庁の刑事が、探偵・工藤新一が日々事件捜査に明け暮れる現場である。そういえば

「新一さんは高校を休学している間、何処で何をしていたんですか？」

「知りたいか？」

新一が尻目で光彦を見やる。光彦は窓の外を向いたままだ。

「いえ……その、数年前に連日報道されていた組織絡みの事件に關与していたことは知っています。新一さんが居ない頃は、毛利探偵が代わりにこの街の事件を解決して　　そういえば、新一さんは蘭さんと幼馴染でしたよね。そうだ。新一さんは、事件を追って蘭さんと離れた後、どうやって再会したん……」

そこまで言つて、あつと口を塞いだ。頬が熱くなる。

「こんなプライベートな質問、おかしいですよね。すみません、忘れてください」

「思ったままに言ってみるよ。俺に話したいこともあつたんだろ？」

予想外の新一の返答に、光彦は身を固くした。

これは今、告げてもいいのだろうか。

今となつてはひどく場違いな気がして、口に出すのが躊躇われる。それは、光彦が新一にメールを出した瞬間に新一にぶつけようと思つていた言葉だった。意識するうちに、段々心拍数が上がった。

「どうした？」

新一が首を傾げる。光彦は視線を新一に向けた。落ち着け、円谷光彦。当初の思惑とは大きくかけ離れてしまったが、これは自分にとってチャンスかもしれない。光彦は心のなかで念じると、深呼吸して、

「新一さんは、どうしていつも自信に満ちた表情でいられるんですか？常に確信を持つて生きているからですか？新一さんを見ていると、小学生の頃に親しくしていた同級生の友人のことを思い出すんです。……新一さんを小学生と比較するのもおかしいですよ。でも、そうさせるくらい彼は　新一さんによく似ていて、僕は新一さんを見るたびに彼には敵わないって思い知らされるんです。は……おかしい話でしょう」

口を開けば、止めどなく言葉が溢れてきた。

新一は光彦の言葉に黙つて耳を傾けている。

「新一さんはきつと少しも迷わず悩まずに、蘭さんと再会したんでしょう？僕も新一さんくらい、自信に満ち溢れた存在であれたら……こんな、プレゼントの包み一つで思い悩んだりしないで済んだんでしょうね。昨日、喫茶店で新一さんに見つかった時も、逃げ出さずに毅然とした態度で居られたのかもしれない。新一さん、新一さんの言う通り、これから僕は灰原さんに会えるとして、僕は一体

どんな顔をして彼女に会えばいいですか？小学生の時となにも変わらない、幼馴染の同級生として会えば正解ですか？僕にはもう……分からなくて」

「だから、お前は考え過ぎなんだよ」

車が繁華街を抜け、米花町の住宅街に入った。

都内でも有名な高級住宅街。新一は車の速度を落とした。

「言つたろ？たまには思うがままに行動してみろって」

「僕にはそれが……できないんです」

「そうか」

車が米花二丁目の通りで曲がる。

昔散々通い慣れた、見慣れた家の並び。懐かしさが込み上げる。

「ここ、阿笠博士の家がある通りですよね？」

ひよつとして、彼女は阿笠博士の家に居るのだろうか。

此処へ来て、それまで曖昧だった彼女との再会が現実味を帯びてきたように思えた。

しかし、その考えはすぐに間違いであることに気づき、光彦は首を捻る。

「けど、たしか阿笠博士は去年フサエさんと結婚してから海外に

」

やはり、事情が分からない。新一は何か思い耽るような顔で運転している。

光彦がそうこう考えを張り巡らせているうちに、阿笠博士の家の手前で車が止まった。

「着いたぞ」

新一が告げる。

彼女の現在の居場所　与えられた正解に、光彦は呆然とした。  
バックギアを入れて新一が駐車したその場所は、所々に草木が茂る、米花町でも有名な古洋館……新一の自宅だった。

古びた洋館。その隣には、思い出の家。

彼女が米花町を去ってから何年が経つただろう。本当はちゃんと覚えていくせに、それを口に出さないのは、彼女が居なくなつてからの日々を実感したくないからに違いない。気がつけば自分は、暇なとき彼女のことを考えるのが癖になっていた。そのくせ、最後に彼女と会話した内容はちつとも覚えていなくて、代わりに覚えているのは、彼女より一ヶ月遅れてこの街を去った少年との会話だった。

自宅の駐車場に車を止めた新一は、エントリーからキーを抜くと、光彦を連れて車を降りた。それから庭の脇道を通って正面玄関に向かう。駐車スペースから玄関まで回り道を強いられることに、改めて目の前の青年が住まう屋敷の広さを感じつつ、光彦は新一の後について歩いた。

「なあ光彦」

「……何ですか？」

「お前、さっき俺のことを『自信に満ちた人間』って言ったよな」  
車内での話だろうか。時差が経ってからの話に、光彦は一瞬だけ反応が遅れた。

「本当に、そう思うか？」「違うんですか？」

新一の言葉に、光彦の言葉が重なる。光彦は更に慌てて、

「いや……少なくとも、新一さんの周りの人間は皆、そう思っていると思います」

付け加えた言葉で、新一が笑い声を上げた。素直な感想を申し述べたのだが、何かおかしい部分でもあったのだろうか。訝しげな視線を向けていると、新一は笑うのを止めて、

「そう見えるのだとしたら、俺は探偵として成功しているんだろうな」

「……自慢ですか？」「さあな」

玄関の扉の前に到着すると、新一はジャケットからキーケースを取り出した。そして鍵穴へ鍵を挿し込み、何のためらいもなく解錠したから光彦は慌てた。

「ちょ、ちよつと!」

「ん?」「こういう、数年ぶりの対面って時は普通、心の準備が必要なもので……」

「車の中で『これから灰原に会いに行く』って言っただろ。ちなみにここは俺の自宅だから、扉を開けるのに心の準備は必要無いな」

「もう!意地悪しないで下さいよ!」

思わず大きな声で言うと、新一はすっと左手の人差し指を口元に当て、

「現実には小説やドラマのように、自分の都合を中心には動いてくれないものさ」

そして新一は玄関の扉を開けた。

「ただいま」

洋館のエントランス部分に入った新一の声で、光彦の心拍数は一気に跳ね上がった。それから間もなく、奥のほうからパタパタとスリ



ツパで歩く音が近づいてきたから、光彦はどうしようもなく赤くなつた顔を新一の背中で隠した。

「お帰りなさい」

4年ぶりに聞いた彼女の声は想像していたよりも低く、落ち着いていた。

「予定よりも早かったのね」

「色々あつてさ。時差ボケは平気か？」

「帰りの飛行機の中で調整したわ」

「それより……」

どうしてこんなことになってしまったのだろう。

そのことを考えるのもいい加減馬鹿らしく感じられるようになってしまった。

成り行き任せに工藤家の玄関を潜り、リビングへ通された光彦が着席させられたのは、高級感が漂うアンティーク調の対面式ベルベツト・ソファだった。間のテーブルにはコーヒークップが二つ並び、光彦が座る向かい側のソファには4年ぶりの再会となる栗色の髪の少女。光彦が幼い頃から密かに思いを寄せていた相手、灰原哀本人だ。

新一はというと、光彦をリビングへ案内し、物言いたげな哀をキツチンへ押しこんでコーヒークップを注文すると、

「それじゃあ俺はこれから帝丹中へ向かうから、後はよろしくな」と光彦の肩を叩いて、再び足早く外へ戻って行ってしまった。つまり、今ここに居るのは光彦と哀の二人。お互い初対面ではないものの、数年ぶりの再会に切り出す言葉が見つからない。

（普通は玄関で対面した時点で自己紹介するものですよ）

光彦は心のなかで悪態を付いた。悪いことに、新一は哀と光彦が対面した時点でお互いに挨拶を交わさせることなく家の中へ押しこんでしまった。自分は今、正面に座る彼女にとって不審者となっていないだろうか。まるで今の状況は、お見合い開始前に仲人に逃げられた。そこまで考えて、光彦は目に見えて狼狽した。

「あの、コーヒークップいただきます」

誤魔化すように、光彦はテーブルのコーヒーカップを手にとると、一口つけた。すると、

「本当、困りものだわ」

と哀が言ったから、光彦は口に含んだコーヒーを危うく吹いてしまいそうになった。

光彦は慌ててコーヒーを飲み下し、コーヒーカップをソーサーの上に戻すと、

「すみません。突然押しかけるような真似をしてしまって！」

実際には何の否もないのだが　　光彦が謝罪を口にする、哀はクスリと微笑んで

「違うわ。新一のことよ」「……へ？」

「あの人、いつも自分勝手にこっちの気持ちなんてちつとも省みない人だから」

哀もまた、カップの柄を持つと、ソーサーごと両手で口元まで引き寄せて一口飲んだ。彼女が家主のことを新一、と呼び捨てにしたのが引かなかったが、光彦がコーヒーを飲む彼女の所作に思わず見惚れて言葉を発さずにいると、哀はコーヒーカップを膝上に置いて

「驚いたでしょう。本当はもう少し身辺状況が落ち着いてから貴方達には連絡しようと思っていたのだけれど」

哀のカップに気を取られていた光彦は顔を上げた。哀は光彦を正視していた。

「……いつ日本に？」

喉の奥から搾り出すように、光彦は訊いた。哀は答える。

「昨日の夜よ」

「日本に居る間は、新一さんの世話に？」

「それはどうかしら。けれど、私はこの家に住むことになるわね」

「……新一さんとは、その、どのようなご関係なんですか？」

哀は小さくため息をついた。聞いてはいけない質問だったのだからか。

「あの、無理に答え」

「兄妹、と言えば正解かしら？」

今度は光彦が息を飲む番だった。

「……え？」

「工藤哀。そう、それが今の私の名前。私、向こうで工藤夫妻の養子になったの。アメリカへ引越した後に色々世話してくれたのが縁で」

「え……でも灰原さん、ご両親の所に行くって」

カップを握る指に力が入る。哀は光彦から僅かに視線を落とした。

「……話す必要もないから隠していたけれど、私の両親は、私が物心付く前に亡くなっているの。……黒の組織事件は、貴方も報道で知っているでしょう？」

光彦は黙って頷いた。

黒の組織事件とは、彼女がアメリカへ引越す前後に世界中で話題となった、政府裏で暗躍し巨大な力を握っていた組織の一斉摘発事件である。黒の、とはその組織の構成員が全員黒ずくめの服に身を包んでいたことから日本のマスメディアが付けたものだ。不老不死という、一代で富と権力を手に入れた人間なら誰しもが考えそうな夢物語をエサに各界の著名人を組織に引き入れ、組織にとって都合が悪くなった、もしくは都合の悪い人間は手段を選ばず排除する手法が問題となり、先述の一斉摘発となった。

「新一さんが、高校を休学してまで追いかけて解決した事件ですね」

「表向きは、そうね」

光彦の言葉に、哀は何故か可笑しそうな顔をした。光彦が眉をひそめると、

「ここだけの話にして頂戴ね。私の両親はその組織のメンバーで、私はずっと組織の監視下に居たの。色々あって私は組織から抜けだして阿笠博士の家に身を寄せたわ。貴方達と出会ったのはその頃ね。それから工藤君……新一が組織を壊滅に追いやって、私はアメリカのFBIに身柄を保護された。と言っても、実際は組織時代と何も変わらない、拘束に等しいものだったけれど。その状況を救ってくれたのが工藤夫妻。新一の口添えで、夫妻が私の身元引受人を申し出てくれたの。流石にFBIはアメリカ国外へ出ることは許可してくれなかったけれど、私は一時的に自由を得た」

そこで哀は言葉を切った。光彦はようやく合点がいった。同じ小学生であるのに、どうして哀は自分達とは違う大人びた雰囲気を持っていたのか。それは組織から身を隠して生活しなければならなかった彼女の身の上起因するものだった。彼女にとって新一は、切ろうとしても完全に切ることができなかった彼女の因縁を断ち切った英雄に違いない。そして組織崩壊後も、新一は彼女の身を案じて策を講じた恩人。

あれ？

「灰原さん、『FBIはアメリカ国外へ出ることを許可してくれなかった』んですよね？」

光彦の疑問に、哀はコーヒークップをソーサーごとテーブルへ戻して肩を竦めた。

「その辺は私にも分からないわ。新一を何度問い詰めても何も答えてくれないし。彼が何かをしたのは間違いないのだけれど。ただ、私は新一から郵送された航空チケット片手に工藤夫妻とFBIの人に付き添われて空港へ向かい、日本行きの飛行機に乗った。そして

昨日、東都空港で彼に『これからは俺の家に住むといい』『必要なら帝丹中への転入手続きも取り付けるから、決心がついたら俺に知らせてくれ』と言われた」

「……新一さんに、返事したんですか？」

「いいえ。質問は以上かしら？」

これ以上の詮索は無用、とも取れる哀の言葉に、光彦は沈黙せざるをえない。

光彦は膝の上で手を組むと、そこに視線を落とした。再び気まずい雰囲気が漂うのかと思いきや、

「それじゃあ、今度は私のほうから質問させて貰うわ」

灰原が言ったので、光彦は顔を上げた。灰原は優しく微笑んでいた。

「円谷君は私が居ない間、元気にしていた？」

「はい。……歩美ちゃんも元太君も、元気ですよ」

「中学生生活はどう？」

「楽しいですよ。僕はサッカー部、歩美ちゃんはテニス部、元太君は柔道部に入って毎日頑張っていますよ。特に元太君なんか部内でも有力視されていて」

「背、伸びたわね」

「灰原さんも伸びてるじゃないですか」

「そうね。けれど、貴方は想像していた以上だわ。声も低くなったわね」

「まだ完全に声変わりはしてませんけどね」

「楽しみね」

「え、そうですか？」

「ああ、早く、二人にも会いたいわ」

そう呟くと、哀は瞳を閉じた。その伏せられた長い睫毛に気を取られそうになった光彦だったが、彼女の言葉で光彦の意識は急に現実へ引き戻されることとなった。

哀は、遠くアメリカに離れていても自分たちのことを考えていてくれた。新一も哀のことを気遣い、あれこれと周囲に手を回して彼女を光彦達少年探偵団のもとへ引き寄せてくれた。それなのに、自分とは下らない嫉妬心を燃やし、誤解と下らない感情で歩美の心を不用意に傷つけ、元太にも呆れられ……光彦は自分自身に問いかけた。

これでいいのか。

いいわけがない。

光彦はソファから立ち上がった。哀は驚くように光彦を見上げた。

「灰原さん」

光彦は真っ直ぐ、哀の目を見つめた。

「急用を思い出したので、一旦失礼します」

そう告げると、光彦はかばんを担いて玄関へ向かった。

「円谷君!？」

哀は慌てて立ち上がり、光彦の後を追う。

光彦が玄関で靴を履いているところで追いつくと、光彦は笑顔で振り向いた。

「灰原さん」

「……なにかしら？」

「戻ってきたら、僕の話、聞いて貰えますか？」



「え？……ええ」

呆気にとられた表情で、哀は頷く。光彦は「約束ですよ」と念を押すと、そのまま玄関の扉を開けて家を出て行った。扉が閉まると、パタパタと走り去る音だけが耳に伝わり、哀はそつとため息をついた。

「……全く、せわしない人達ね」

光彦は工藤家の屋敷を出ると脇目もふらず、一直線に走り始めた。目的地である、帝丹中学校を目指して。

コナンを越えたくて、彼の幻影ばかりを追いかけていた。

雑学の書物を読み漁って、サッカー部に入部して。ポツカリと開いてしまった少年探偵団の穴を埋めて。けれど、その追いかけてこは酷く疲労を伴うものだったような気がする。気がつけば、卑屈な考えを浮かべることが多くなった。誰かが真剣に話をしていても、興味がなければそっぽを向いて、違うことを考えて。

帝丹中学校へ向けてひとしきり走った光彦は、やがて1年B組の教室の前へ立つと、勢い良く扉を開けた。まだ授業中だったクラスの生徒の視線が、一斉に光彦を向いた。

「すみませんでした！」

光彦は教室内に向かって思い切り頭を下げた。クラス中が静まり返る。

「おかえり、光彦君」

一番に口を開いたのは歩美だった。歩美は目の端に少し涙を滲ませていた。

「まだ授業は終わってないぞ。席に付け」

授業を開いていた教師が咳払いすると、光彦は勢い良く自分の席に座った。授業が再開されてから光彦は一度、歩美を見た。歩美は静かに微笑んでいた。光彦は心の中にあつた靄が晴れるのを感じた。

放課後、光彦は担任からこっぴどく説教を受けた。そして説教の後、教室に居た元太に一本背負いを食らった。覚えたての技を披露し得意げにするその姿が癪に障ったので、光彦は元太の尻を思い

切り蹴り飛ばした。2人は歩美にこっぴどく叱られた。体格が良いはずの元太が隣で小さく見えて、光彦は思わず笑った。

3人並んで帝丹中の玄関を出ると、正門前に新一が立っていた。

「遅いぞ、お前ら」

3人並んで新一の車の後部座席に座ろうとすると、新一が「もう3人で座るには狭いんじゃないのか？」と言って歩美を助手席へ乗せようとした。歩美は喜んだが、光彦と元太が猛反発し、じゃんけんの末に新一の隣には光彦が座った。

「人気があるのかないのか、複雑な心境だな」

そして車が発進する。

歩美の自宅へ向かうかと思いきや、車は米花百貨店へ向かったから光彦は驚いた。

新一を見ると、新一は光彦に目配せした。その口元が小さく動く。

『すぐに分かる』

百貨店についた4人はケーキやお菓子を買った。途中歩美の姿が見えなくなったが、会計を終えて再び車を停めた百貨店の駐車場へ向かう頃には戻ってきた。そして再び車に乗り込んだ少年探偵団が新一に案内されるがままに、目的地を目指す。

そこは新一の家だった。ここで光彦はすべてを理解した。歩美がインターホンを押すと、帝丹中から帰っていた蘭がスピーカー越しに出た。

「はい」

「吉田です！」

歩美が元気よく答えると、暫くして玄関の扉が開いた。そこに立っていたのは、茶髪のウェーブがかった少女。そこで初めて、光彦達は先の百貨店で購入したクラッカーの糸を思い切り引いた。パンと軽い炸裂音が周囲に響く。

「『サプラーイズ！！』」

扉を開けた少女　哀は、とても驚いた顔をしていた。何と言っているのか分からないといった様子でその場に立ち尽くしていた。光彦達より一歩後ろに立っていた新一が告げる。

「おかえり、『灰原』」

その穏やかで澄んだ声色が、光彦の脳裏にかつての友人をフラッシュバックさせた。

江戸川コナン、を。

その夜、新一の家では哀の帰国歓迎会が開かれた。

高級そうなベルベットカーペットが敷かれた広いリビングの中央テーブルには、蘭が手作りした料理や新一達を買ったケーキなどが並べられ、一同はテーブルを囲んで思い思いに食事を楽しみながら哀との会話を楽しんだ。その中で、歩美は今回、新一に哀が戻ってくる知らせを事前に受けており、元太と計画して光彦と哀にダブルサプライズをする予定だったということを光彦にネタばらしした。

「それなのに元太君は口を滑らせるし、光彦君とは喧嘩になっちゃうし、新一お兄さんは新一お兄さんで光彦くんを私たちより先に哀ちゃんと再会させちゃうし。歩美、怒ってるんだから」

歩美が言うと、言われた元太、光彦、新一は口々に歩美に謝罪の言葉述べた。その姿があまりにも情けない雰囲気漂うものだったので、蘭と哀は思わず笑った。

「あ、そうだ哀ちゃん。歩美からプレゼント！」

思い出したように手を叩くと、歩美は先ほど百貨店で購入したらしい箱の包みを取り出し、哀に手渡した。

「オルゴールなんだけど、アクセサリー入れになってて可愛かったから」

「ありがとう。大事にするわ」

哀が笑顔で礼を言う。歩美は光彦に目配せした。

ほら、光彦君もプレゼント、あるんでしょ？

光彦ははっとしてリビングの壁際に置いた通学カバンから取り出した。

渡したくても渡せずにいたプレゼント。ブローチが入った小さな包み。歩美は知っていたのだ。元太と一緒に連れられてアンティークショップへ行った後、歩美が哀に似合うといったブローチを光彦がこっそり購入していたことを。

正直、もうこのままずっと渡せないものだとかの何処かで思っていた。それでも手放すことは出来なくて、ずっと肌身離さず持ち続けていた哀へのプレゼント。

ようやく、本来の目的を果たせる時が来たのだ。

「あの、僕からもプレゼントです」

高鳴る心臓に、上擦りそうな声を押さえ、光彦は包みを哀に差し出した。

「私に、くれるの？」

哀が訊く。光彦はぎゅっと目を閉じた。

緊張を帯び、微かに震える光彦の手。その平にあるプレゼント。何度も手に持つうちに包みの端が少しよれたその包みを、哀はそっと受け取った。

「ありがとう」

礼の言葉に、光彦は顔を上げた。

微笑む哀の姿。この一瞬を大事にしたいと、光彦は思った。

「それじゃ、改めて乾杯しようぜ！」

元太が言うつと、一同は笑顔でグラスを手にとった。

「灰原の帰国と、少年探偵団の新たな門出を祝して」

「『乾杯！』」

ひと通り食事が片付くと、少年探偵団は哀を囲んで定期試験に向けて勉強会を始めた。それぞれが苦手とする教科を勉強しながら、分からないところがあつたら互いに質問したり新一に訊ねたりして解いていく。元太が英語の問題で躓いていると、哀が横からスラスラとネイティブな英語で問題の解説を始めたから、一同は思わず聞き入った。

「灰原が俺の代わりに試験受けてくれたらいいのに」

元太がふてくされて愚痴を零すと、今度は新一がクイーンズイングレリッシュを披露した。きれいで訛りのない発音に、歩美は目を輝かせた。

「新一お兄さん、なんて言ったの？」

「要点さえまとめれば、試験なんて簡単だって言ったのさ」

え？

新一の言葉に、光彦は確かな違和感を覚えた。

「新一さん」

光彦は反射的に立ち上がった。そして新一の腕をとる。

「？急にどうした、光彦。そんなに驚いた顔して……何かあったか？」

腕を掴まれた新一は驚きを隠せない顔で光彦を見た。

光彦も戸惑いを隠せない表情で新一を見つめている。光彦は思い出していた。

『金庫の中のリンゴを取り出すには、扉を開けないと駄目だろ？中身を知るにしても、見るべき場所を見なければ、大切なものを見落としてしまう』

先ほど新一が元太に述べた言葉。日本語と英語の違いはあるが、それはかつてコナンが光彦に向けて発したものと同一の言葉だった。新一がコナンに昔教えたものなのだろうか。以前の自分であれば、まっ先にそう考えただろう。しかし、今の光彦は違っていた。頭の中で、これまでの新一の言葉を思い出す……

ああ、そうだったのか。

これまで断片としてしか受け止めていなかった事実の全容を、光彦は悟った。

「ふふっ……」

悟ると同時に、光彦は込み上げてくる笑いを堪えなくなつて笑い声を漏らした。しんと静まり返ったリビングに、光彦の笑い声が響く。

「どうしちゃったんだ？お前……」

怪訝な顔を向ける新一。他のメンバーも不思議そうな顔で光彦を見つめている。

「いや、何でもないんです。すみません」



ああ、自分の中にある考えが真相なのだとしたら、自分は今までなんて思い違いをしていたんだろう。探偵失格ではないか。遠くへ離れてしまったはずの彼は、実はずっと自分達のそばにいて、自分達を見守っていてくれていたのだ。きっとこれは彼にとって重大な秘密で、これは俗に氷山の一角と呼ばれるものなのかもしれない。けれど、真実を知ってしまったからには黙ったままではいられない

「新一さん、今度、コナン君に伝えて下さい」  
「何を？」

「10年後の貴方には負けませんって」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1461q/>

---

I was detective.

2011年5月18日10時01分発行